

蕪村攷

花に眞田の謠かな

蕪村の俳句に多くの特色あり。そが一つが題詠により、同じ主題に多年を費やして句を作れる連作なり。「連句」なる文藝は、複数の人物がそれぞれに前の句を受けて情緒や気分による句ひ付けをするものにて、主題なければ變化につぐ變化により一卷終はるものなれど、「連作」は、一貫せる主題により何句も作るものにて、しかも一句一句獨立して鑑賞せらるるものなり。

〈花いばら三句〉（蕪村句集）

かの東臯にのぼれば

花いばら故郷こきやうの路に似たる哉（325 安永三年〔一七七四〕）

路たえて香かにせまり咲いばらかな（326・安永四年〔一七七五〕）

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら（327・天明三年〔一七八三〕）

この連作、一年かけて最初の二句作られ、「いばら」「路」の語をして重複せしめたり。さらに蕪村、死の前年になりて「かの東臯にのぼれば」なる前書を付け加へたる上、第三句を繼ぎ足して三句の連作として完成せり。しかもこの三句のいづれも名句とせらる。

餘談のごとくながら、正岡子規門下による「蕪村句集講義」にもこの三句様々に論じられ、内藤鳴雪めいせつ茨の刺とげを問題にせるを、正岡子規それを否定し、高濱虛子「先生は茨と薔薇を混雜してゐられる」と評したるは、蕪村再發見の功はあれど、明治の蕪村不消化を示して微笑ましくさへ感ぜらる。石川啄木が歌集『一握の砂』には、同句を用ゐての歌あり。「愁来て丘にのぼれば名も知らぬ鳥啄（ついで）めり赤き茨の實」、昭和に入りて抒情詩人立原道造たちばなみちぞう、この第三句をことのほか好みたる由、清々しさを覺ゆ。筆者としては第二句に深い隱喩を感じて心搏うちたる。故郷への路絶えたるか、あるは人生の何かの岐路に立ちもとほりて、目の前に咲き誇る野いばら、むせぶがごとき高き香に胸せまり、こころの故郷と共振するにはあらざるか。

前書の「かの」とは、萩原朔太郎が江戸の近代詩と讃美せる蕪村が八句詩「北壽老仙をいたむほくじゆうらせん」に「をかのべ何ぞかくかなしき」と使ひたるをさす。陶淵明の「歸去來辭」由來なり。

〈高野の花六句〉（夜半叟句集）

かくれ住て花に眞田が謠かな（394・安永九年〔一七八〇〕）

花の御能過おのうて夜を泣く浪花人（395・安永九年〔一七八〇〕）

ちるはさくら落るは花のゆふべ哉（396）

花に来て鱒なますをつくるおうなかな（397）

玉川に高野の、花や流れ去さる（398）

花ちるやおもたき笈おひのうしろより（399）

この六句、句集にも遺稿にも載せらるゝが、「夜半叟句集」には番號順に並べられ、同一主題による連作なること明白にせらる。全篇に「花」の語現はれ、二句一聯の三聯集められたるものなり。「蕪村句集講義」にも「春櫻」の項にこの句あり。

蕪村に政治に關はる句は「畑うちや法三章の札のもと」と、高札の詠まれたる句とせらるるが、この連作には眞田幸村登場す。人物名使はるゝは珍しきことなり。「蕪村句集」にはこの詩篇の第一、第五の二句のみ掲載し、それに〈高野を下る日〉と前書あるによりて、高野山麓九度山に住みたる眞田幸村が大坂へ向はむと山を降りるをりを詠みしものとわかる。

周知のことなれど、眞田氏、關ヶ原の戦（一六六〇年）のをり信州上田にて徳川秀忠を邀へ撃つ。西軍破れて眞田昌幸、信繁父子、本來ならば死罪となるべきところを高野山麓九度山にての蟄居の處分にて濟ませらる。されど近隣の村々には、動靜を監視するやう命令出さる。それより十三年ほど經ちての眞田幸村（信繁）自身の姉婿にあてたる書翰には「去年より俄にとしより、殊の外病者に成り申し候。齒なども抜け申し候。……とかくとかく年のより申し候こと、口惜しく候」とある。　　齡　　いまだ四十七歳、おそらく大阪の戦豫想し、徳川方の誰ぞに讀まるゝを想定せる近況報告ならむ。智略家の父昌幸、既にこの地に歿せり。

その翌年、徳川との對決やむなしと判斷せる豊臣秀吉の遺子秀頼、眞田幸村に大坂城入城を要請、そを受けて幸村、九度山脱出をはかる。監視役の村主達を宴會にさそひて、皆の酔ひの隙に山をおりたりとか。

まづ隱遁の身の武士、出陣を前にし、櫻の花に觸發せられて謠をうたひ舞ふ。先の幸村の書翰とは裏腹なる「老當益壯・老いて益々壯なり」の蕪村が座右のつぶやきが、イメージ豊かに展開せらる。筆者、己が口はこの句を轉がすごとに、高野の櫻の、歴史の一斷片の腦裡にひろがりて、心を搏つ名句なるを覺ゆ。

「散るは櫻落つるは花」と華麗なる高野の落花が、奥の院にある清流玉川を流れ去る。あるは、大坂の城の落つるが、難波人の歎くが豫感せられたるか。この難波人、あるは豊臣秀頼なるか、淀君なるか。廻は誰やらむ、鱒をつくるは九度山脱出の夜のイメージなるか。上田秋成に雨月物語あり。その一篇「佛法僧」には、高野山の一夜に豊臣秀次が亡靈の一行現はれ、宴を催し、奥の院の前なる玉川の清さを論ず。そこに膾の出ること、高橋庄次氏の指摘によるものなり。上田秋成と仲よかりたる蕪村、「佛法僧」の一齣をイメージしたるか。

最後の句は、眞田幸村一行の山伏姿となりて、武具などの入りし重き笈を負ひて山を降るところならむ、最期の合戦に向ふなるか、その後より櫻の花片、追ふがごとく慕ふがごとくに散る。六篇の俳句にて作られたる、清き潔き舞臺にて一場の劇演ぜられしごとき連作構成なり。

大坂冬の陣（1614）にて眞田幸村、徳川家康軍を手玉にとりたれば、その名聲天下に鳴り響けり。和睦後間なく、家康は高録にて幸村を召し抱へんとしたるも、幸村「有難くはござるが、利欲のために心を翻すは、士の恥ぢるところでござる」と斷り、夏の陣にては更に果敢に家康を襲ひたり。戦後江戸幕府、当初は民の幸村讚美の聲を抑へしが、蕪村在世の江戸も中頃となれば、民心の要望も強く、一方にては忠義心を涵養せんがため眞田幸村評價の高まりを容認す。

蕪村が連作、句集にはばらばらに切り離して並べられたること多し。爲に個々の句を解釋する評となれば的はづれの説明となること多し。連作により一つの主題を多彩に展開せむとする、蕪村が近代詩感覺の持ち主なるを度外視すれば更なり。

眞田一族の高潔さ、御能の謠と舞、九度山を含む高野山の清らかさ、華麗なる櫻花、その混淆こんかうのうち、豊臣家への哀惜、大坂の滅びの姿浮び上がり、あはれにも華やかなる舞臺出現させたがこの連作による挽歌ならずや。